

振興会ニュース

第 7 号

1997年 8 月

日本バスケットボール振興会

目 次

- 会長就任にあたって（住田正二） 1
- 平成9年度春季役員会開催 3
- 各組織団体会長懇談会の開催－初のバスケットサミットー 9
- 会員からの一言 10
今泉 健一 奥田 薫 乙部 功
上谷 富彦 二宮 正行
- 振興会の役員・会員名簿一覧表 14

バスケットボール各組織団体会長懇談会を開催

ー初のバスケットサミットー

さきの理事会の決定に基づいて、振興会として日本協会をはじめ各組織団体とのコミュニケーションを図るとともに、会長方相互の親睦の促進に資するため、以下のように、初めてのいわゆるバスケットサミットを開催いたしました。

1. 日 時 平成9年7月17日（木） 赤坂キャピトル東急ホテル

2. 出席者 辻兵吉（日本協会会長）加藤祥行（JBL会長）
加島義一（日本実連会長）牧山圭秀（振興会名誉会長）
住田正二（振興会会長）黒川義雄（振興会副会長）
富士秀雄（振興会副会長）〔鬼塚喜八郎学連会長は欠席〕

3. 懇談の概要

- (1) まず、住田会長及び牧山名誉会長より、それぞれ新しく就任したことに伴う挨拶がありました。
- (2) 次いで、各会長からそれぞれの団体の現状について説明がありました。
- (3) そのあとは自由懇談ということで、バスケットがプロ化する場合の問題点、先行経験としてのプロサッカーの現状と問題点、コーチ・審判のあり方と日本協会の係り方など、多岐にわたっての話し合いが約2時間に及び、時間切れ閉会となりました。
- (4) 初めての試みであり、顔合わせの意味もあったが、多岐にわたる話題を詰めるところまでは至りませんでした。

今後は、テーマを日本のバスケットの活性化に繋がる重要課題等にしばって、折をみて開催することが望まれると思います。

会員からの一言

韓国との違い

理事
今泉 健一



明治大学バスケットボール部は、韓国高麗大学籠球部との間に、30年近くにわたり、定期戦をもち、毎年、交互に、遠征し、交歓をおこなっている。

その関係で、高麗大学のスタッフやOBと、両国のバスケットの違いや、指導方法、指導体制などについて、話し合う機会が多い。

このところ、我が国のナショナルチームも学生代表も韓国に歯が立たない状況が続いているが、日本がオリンピックや世界選手権に出るためには、韓国は中国とともに、なんとしても超えねばならない大きな壁である。

今年、明治大学の韓国遠征の際にも、先方のOBと、いろいろ意見交換をする場があった。

ナショナルチーム強化の第一歩は学生を強くすること、この認識はお互い一致したが、両国の大学における指導体制の違いが話題になった。韓国では、各大学とも、専任のコーチングスタッフ制をとり、スタッフが常時、体育館に行ける体制をとっているのに対し、我が国での選手指導の実態は、一部を除き、大方はOBの母校を思う気持ちにおんぶした、いわば、ボランティア活動である。本来の会社業務をもち、時間を遣り繰りしての指導は、相当な熱意をもってしても、時間の制約があり、自ずから、選手との接し方に限界がある。

この辺のことについては、それぞれの大学で考えるべきことかも知れないが、彼我の差を思うにつけ、我が国のバスケットボールの今後、なにか、学生バスケットのレベルアップのためにも、大所高所から、何か、方策はないものかと思うこの頃である。

スポーツあれこれ

理事
奥田 薫



◇スポーツの世界、殊に野球で暴言暴力は禁物だが、裁判官と審判どちらも厳としたルールに従って、いかに裁くかが使命。審判の何がそんな魅力なのか、ときとして受ける質問だが、見方を変えれば、「審判冥利」とも言えよう。だれよりも間近かで試合を楽しんでいるファンとも言える。一人の審判が日本球界に愛想をつかし去った。恐怖に身を震わせた経験だけを胸に帰国したとすると残念でならない。

◇「柔道は礼に始まって礼に終る」米シアトルのある柔道少年の両親がクリスチャンであることを理由に、「礼は宗教的信念に反する」と主張、訴訟を起す。連邦地裁は「礼をする必要はない」と訴えを認める判断を下した。日本人の常識からまことに奇異な判断だが、ことほどに、左様文化の相互理解は難しい。

◇自分の打ったゴルフボールの下敷になって生きたトンボが羽をばたつかせている。さあ次の第3打、このボールをどう打つか。

そのまゝ打てばトンボは死ぬ。プロゴルファーの福沢義光さん、ペナルティーは覚悟のうえボールをビックアップして、トンボを逃してやった。昨秋実戦での話。この心やさしいプレーに日本ユネスコ協会は日本フェアプレー賞を贈ったと言う。ルール違反でも、ほゝえましい話。何であれ、プロ競争は厳しいが、心やさしいフェアプレーはその競争の中で光る。

◇いやな事件が続く昨今。テニスの全仏オープンで平木理恵選手の笑顔が実にさわやかだった。正規の試験でNTTに入社、出張扱いの遠征で1年の半分を海外で、得意のパソコンを携帯し世界中に移動、各国の大会の日程の把握ホテルや飛行機の予約もパソコン通信でこなす頼もしさ。偶然の出会い即席のベアーとはいえ、ポイントを取っても取られても笑顔でポンと手を合やす息はぴったり。続く、ウィンブルドンでの活躍を期待したが、結果、残念というより、スッキリさわやかな拍手をおくりたい。栄冠を手にしたその時点で本人をとりまく環境の変化に驚いたという。

真さしく スポーツ選手に甘えは無用と言べきでせう。

実連加盟の頃の思い出

理事
乙部 功



振興会の理事の末席をけがさせて頂いております。早いもので始めて関東実連の競技委員会に入れて頂き、神田神保町の天ぷら屋「喜仙」の2階で油の匂いをかき乍ら組合せのお手伝いをしだしてから、40年余りたってしまいました。こんなに長い間、関東実連、日本実連、協力会、振興会とバスケットに係わってこれたのも、皆さん気持の良い方達ばかりで、しかも全く違う職業の人達が利害関係も損得勘定も無しで今というボランティア的にやってきたからだと思います。勿論皆さんがバスケットの好きな方達の集りだったことは、言う迄も無いことでしょう。

さて、私がバスケット界に係わることとなるきっかけは、勤務しておりました気象庁でバスケット好きの先輩が、当時スポーツが盛んだった気象庁にバスケットボールクラブを作ろうではないかという呼びかけをしたことからでした。何分大部昔のこととなり、いささか記憶もあいまいですが、多分昭和28年だったと思います。当時は今と比べると公務員になるのもそれ程むずかしくなく、偏差値もそれ程重要視されていなかったもので、気象庁の職員にも、学校時代に色々なスポーツをやっていたものが結構おりました。そんなこともあり、前述の呼びかけに応じて学生時代選手をやっていた者、選手はやってなくても好きな者が集まり、割に簡単にバスケットボール部が出来、人事課の厚生係に登録しました。

又、その頃は日本の戦後の復興が始まったばかりで、東京の都心も未だビルも余り無く、今の北の丸公園の中に野球場があった位で、気象庁の敷地も現在の伊藤忠商事・竹橋会館・東京消防庁・大手町合同庁舎と気象庁ビルが建っている処が全部含まれておりました。伊藤忠商事と竹橋会館が建っている処には、関東大震災の写真によく出てくる時計塔と戦争で焼け残った建物の他に、何棟かの官舎、それにテニスコート兼バレーコートがありました。そして道路をはさんで反対側の今の気象庁ビルのある方の敷地には、戦争後建てた木造のバラックに毛の生えた様な庁舎が建っていましたが、山手線の高架が見られる位その間に高い建物が無く、構内には空地が一杯あったので、バレーボールやソフトボールも出来ました。

そんな空地の内一か所だけ手つかずの場所があり、丁度バスケットボールのコートが出来た広さがありました。此処に前述のバスケット部の連中が目をつけ、昼休みや時間外に交代でローラーを引っ張って平らにし、人事課に交渉してネットフェンスとゴールポスト

を立てて貰い、首尾よく土でしたがアウトドアのバスケットコートが出来ました。此処で練習を重ねて何とかチームの体をなし、関東実業団バスケットボール連盟の当時の8部に入れて頂くことが出来ました。

今から思うと皆給料も安く貧しい生活をしておりましたが、何となくのんびりした時代で精神的には豊かだったと思います。しまらない文章で誌面を汚して恐縮ですが、自動車が未だ少く、都電が巾をきかせていた頃の思い出です。



「フープ・ドリーム」

理事
上谷 富彦



JBL設立の基本理念を博報堂と検討した際「バスケット・ボールのプロパティ（財産）を拡大する事」が重要な課題として提案された。

「プロパティ」という聞きなれない言葉で具体的なイメージが持てなかったが、5月中旬、封切られたアメリカ映画「フープ・ドリーム」を観て、アメリカ社会におけるバスケットは、単純な競技という範囲を超えて社会の中にきちんと根をおろしている事が理解出来た。丁度わが国で大相撲が国技として伝統的に存在している様に。

映画のストーリーを簡単に紹介すると、シカゴの貧しい家庭に育った二人の才能豊かなバスケット少年が、素質を見込まれ名門私立高校にスカウトされ入学する。この二人は実在した人物でカメラは4年間のバスケットを通じる生活を丹念に書き出す。コーチ、チームメイト、そして家族との色々な出来事を通して1人は学校を中退、公立高校に転校するが二人はやがて州の大会で顔を合わせる。貧しい家族が一少年と共に将来の夢を見る。アメリカでは、バスケットが文化として位置づけられている。

ところで、振興会にはバスケットを愛する多くの人々が集っておられる。だが残念ながらバスケットを体育、学校教育という範囲で、考えがちである。ストーリー・バスケット、ハンディキャップを持った人達、バスケットを見るファン等々もっとバスケットとの財産を拡大していく事が重要ではなからうか。これこそがJBL設立の基本理念であり、その頂点にプロとしてのバスケットが存在する。因みにJBLでは、日本リーグ開催の地方拠点でこの作品の上映を企画しており、8月には宮城県白石市が試写会を行なう予定と聞いている。いつの日かわが国でも、このような作品が生まれる風土を造っていく事が私の夢、フープ・ドリームである。

限りなく遠い夢かも知れないが。

「ナショナル選手」 の再登場

理事
二宮 正行



19才の青年の体力が35才の大人に相当しているという。ある大学での調査結果である。今日この国の青少年の体力の劣弱さには極めて深刻なものがある。しかも高齢化社会での、此の後40年にもわたる高負担のことをおもえば、これはいかにしても放置出来ることではなく、その解決策のひとつとして、スポーツの振興は、まさに焦眉の急、不可欠のこととなっている。

それには、まずスポーツが社会に果す役割への正当な認識と、国民的理解が必要なのだ。国民の眼をスポーツに集中させ、それらを定着させるためにナショナルチームの存在が大きい。青少年の要であり、憧れの対象である「ナショナルチーム」。競技団体の浮き沈みを握っている面もあり、その選手に課せられる責務は益々重大さを増している。

ところで、多少スポーツに興味を持つものならば、誰れもが知るように、ナショナル選手になるための技能の習得、身心の鍛錬には非常な厳しさが求められ、その事は昨今の価値観の多様化とか、楽しむ生活とか、飽食の社会での常識をはるかに越えるものでなければ実現を見ない。ファンに夢を託され、アジアの頂点を目指し、又世界レベルへの挑戦となれば厳しさは増すばかりだ。

日本の各競技団体はかねてよりナショナルチーム選手の、社会人としての生活と、スポーツに関わる時間の使い方に確固たるものが無い事の悩みがあった。仕事とスポーツの間の現象処理のうまさ、名マネジャーの資格の一つでもあった。

10年程遡った頃より、社会現象の変化、風潮を先取りし、競技団体には契約選手、プロ選手の誕生が目立ちだし、組織運営のプロ化宣言のJリーグは記憶に新しい。

ところで期待を背おって活躍をした選手にも、引退し普通の社会人となる日は必ず来るし、人数的にも少なくないだろう。

一般的に考えると、民間企業にせよ、公共団体にせよ、同年代の人々は職場の中堅として働き盛りでありハンディキャップは少なからぬものがある。有名な元スポーツ選手ゆえの余得はあったとしても、社会人としての実績とか、能力を問われた時、兎角注目されやすいだけに、その眼が必らず暖かいものばかりとはかぎらない。このような引退後の不安があるとするならば、今全力を注ぐべき時点でも、無意識のうちに競技に集中出来ない事が起りうるだろう。頭をかすめるのは人間関係であり家族との生活であり、又アルバイト

の事であったりする。ひそかに移籍の誘いがあれば心の中では、ゆれ動くことになる。現状では選手を責めることは出来ないが、競技の成績や、振興にマイナスとなりえるこれらが、潜在しているのも事実である。

このような問題を乗り越えていく為のひとつの方法として、ナショナルチームが持つ民間親善外交使節団としての側面を重視して、プレイヤーを終えたあとに、もう一度ナショナルチーム時代の経験を生かし、さらなる力を持って再登場を願いたいと考える。

具体的には、遠征メンバーから適性者を何人か目ぼしをつけ、遠征先の大使館、留学生グループ、企業駐在員等の協力を得て、現地特有な物事の修得、知人の拡大等、地区（アメリカ、ヨーロッパ、アジア等）の専門家として将来の仕事を見すえさせ、選手時代から意識を持たせると良い。ゆくゆくは言語、生活習慣、歴史等の修得も必要だ。

兎角国際的場面で引込み思案ゆえに、技量を十分に発揮出来ないでいる日本人選手にとって、現地とチームを結びつけ、競技成績向上にも結びつくものと思われるし、当事者が使命感を持ち、役割の重要性を理解した時、その結果への期待は大きいものになる。

又これらの担当、役目を終え再度職業についた時、国際的知識人、ビジネスマン、スポーツ指導者として、いずれにせよ有利な条件で仕事を得られ、余裕、自信というものが、若い時代の努力の報償として、ついて廻ることだろう。

地区専門家は海外だけではなく、国内各県単位、又はブロック単位での駐留が実現すれば、ファン層の分析や獲得への具体策も作成出来る。又若年層への指導時間が持てれば、内容は充分である。これに加えてプロチームが誕生した時に、フランチャイズを敷く可否等の調査も仕事に入りたい。

現在行われている成績順位の賞金や、活躍を認められた報奨金の支払の次に何があるのかを考える時である。アマチュアリズムが変形してきている現在、新しいスポーツの姿を、勇気を持って開拓しなければならない時だ。ナショナルチームに籍を置いた人達が自己への確信と役割りを理解し、堂々と力を発揮すれば、スポーツのプロ化等を含む進展の立派な切り口になる。新しい芽の芽ぶきを待ちたい。

